

## ループスアンチコアグラント陽性検体が凝固一段法で第Ⅷ因子活性低値を示す要因の検索

◎川崎 晴希<sup>1)</sup>、木村 美香<sup>1)</sup>、寺田 早良<sup>1)</sup>、竹本 賢一<sup>1)</sup>、大江 宏康<sup>1)</sup>  
金沢大学附属病院<sup>1)</sup>

## 【背景】

ループスアンチコアグラント(LA)は、活性化部分トロンボプラスチン時間(APTT)が延長する原因の一つである。また、一部の LA 陽性患者血漿は、APTT 試験と同じ試薬を用いて測定する、凝固一段法での凝固第Ⅷ因子活性(FⅧ:C)が低値を示すが、その要因は明らかでない。今回、凝固一段法で LA 陽性検体が FⅧ:C 低値を示す要因について検討した。

## 【対象と方法】

2021年4月から2023年10月までの期間で、希釈ラッセル蛇毒時間(dRVVT)法、APTT法、リン脂質中和法のいずれかで LA 陽性と判定された検体を対象とした。対象検体において凝固一段法と合成基質法の FⅧ:C を比較し、APTT 秒数、抗カルジオリピン(CL)抗体、抗 CL β2 グリコプロテイン(GP) I 複合体抗体、抗 CL IgG および IgM、抗 β2GP I IgG および IgM の抗体価を評価した。APTT 秒数と各抗体価の関連、および FⅧ:C 差違と各抗体価の関連を、Spearman の順位相関係数の検定により検討した。統計学的

解析には EZR(Ver1.62)を使用した。また、各項目における検出限界以下の値ならびに極端値を除外して解析を行った。

## 【結果と考察】

対象検体は 18 件で、うち 13 件が凝固一段法で FⅧ:C が低値であった。APTT 秒数と各抗体価について、抗 CL IgM ( $P = 0.017$ )と抗 β2GP I IgM ( $P = 0.027$ )が APTT と有意な相関を示した。一方で、各抗体価と凝固一段法あるいは合成基質法の FⅧ:C の差異には有意な相関関係が見られなかった。検出限界以下の値を示した検体が最少で 1 件、最多で 10 件と多く、解析対象が少なかったことが研究限界となったことが考えられる。

## 【結論】

LA 陽性検体で APTT の延長と抗 CL IgM や抗 β2GP I IgM の関連が示された。これらは凝固一段法で FⅧ:C 低値との関連は見られなかった。

連絡先：076-265-2000（内線 7165）